

〔講演録〕 日本文化学部企画公開講演会

## 戦争と大学——日本文史研究者の反省——

岩 井 忠 熊

（第二部開き手 上川通夫）

二〇一七年一月二十九日（日）、愛知県立大学長久手キャンパスS棟二〇一教室で、日本近現代史研究者の岩井忠熊氏（立命館大学名誉教授）を講師とする公開講演会が行われた。日本文化学部企画で、本学地域連携センターとの共催事業である。本稿は、その講演を中心とする記録である。すでに二年たったが、なお新鮮かつ重要な内容であると判断し、この学部論集で再現させていただくこととした。

本学日本文化学部では、二〇一五年度より学部事業「あいち人文社会ルネッサンス」として、「愛知県史展と愛知文化遺産の探究」「世界展開する海外日本人研究者に学ぶ」「留学生的愛知ガイドづくり」を実施してきた。そのうちの、「愛知県史展と愛知文化遺産の探究」では、二〇一六年度のテーマを「戦争と大学」とし、愛知県史編さん室（愛知県総務部法務文書課）との共催で、図書館展示と講演会を実施した。展示では、長久手キャンパス図書館との共同で、『愛知県史』を軸としつつ身近な実物を併せて陳列した。これに関連づけて実施したのが、岩井忠熊氏の講演であった。

講演副題「日本文史研究者の反省」は、企画の趣旨を汲んで、岩井氏ご自身でつけられた。当日の参加者二〇〇人余りのうち、過半は一般の方々であった。第一部の講演に引き続き、第二部では、配布用紙で提出された学生からの質問を司会の上川が整理し、対話の形式で岩井氏にお答えいただいた。第一部のご講演では、壇上で終始お立ちになったまま、十分なご準備に

基づいて明快に話された。第二部の対話では、淀みない即答の中に、「戦争と大学」というテーマをこの場で語ることへの配慮が満ちている。戦中を含む現代史に生きたご経験についての内省的な話者として、また自ら近代史・現代史と格闘された歴史家として、厚く重く紡がれた言葉は、共有した聴衆それぞれに歴史的事実の意味と自らの問題意識への省察を喚起したに違いない。この誌上に再現し、さらに広く共有しようとする意図の一つはここにある。

なお、講演録の見出しは当日配布されたレジュメに従って付した。( ) は編集時に付した。  
以下、あらかじめの参考として、岩井氏のご略歴と主要なご著作を記す。

### 略歴

- 一九二二年 熊本市生まれ。少年時代を大連市（中国、旅大市）で過ごす 大連二中卒業
- 一九四三年九月 姫路高等学校卒業文科乙類卒業
- 一九四三年十月 京都帝国大学文学部史学科入学
- 十二月 海軍入隊 のち第三十七震洋隊（特攻）配属
- 一九四五年八月 兵役から復員 復学
- 一九四八年三月 京都大学文学部史学科（国史学専攻）卒業 四月 大学院入学（一九五五年三月退学）
- 一九四九年四月 立命館専門学校講師
- 一九五一年四月 立命館大学講師 一九五五年四月 助教 教授
- 一九六五年四月 教授
- 一九八八年三月 立命館大学定年退職 四月 名誉教授

### 主要著作

・単著

- 『日本近代思想の成立』一九五九年、創元社
- 『明治国家主義思想史研究』一九七二年、青木書店

- 『天皇制と日本文化論』一九八七年、文理閣
- 『学問 歴史 京都』一九八八年、かもがわ出版
- 『天皇制と歴史学』一九九〇年、かもがわ出版
- 『学徒出陣―わだつみ世代の伝言―』一九九三年、かもがわ出版
- 『明治天皇―大帝―伝説―』一九九七年、三省堂
- 『大陸侵略は避けがたい道だったのか―近代日本の選択―』一九九七年、かもがわ出版
- 『近代天皇制のイデオロギー』一九九八年、新日本出版社
- 『特攻―自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言―』（兄岩井忠正との共著）二〇〇二年、新日本出版社
- 『西園寺公望―最後の元老―』二〇〇三年、岩波新書
- 『戦争をはさんだ年輪―歴史研究者のあゆみ―』二〇〇三年、部落問題研究所
- 『陸軍・秘密情報機関の男』二〇〇五年、新日本出版社
- 『靖国』と日本の戦争』二〇〇八年、新日本出版社
- 『十五年戦争期の京大学生運動―戦争とファシズムに抵抗した青春―』二〇一四年、文理閣
- ・編著
- 『近代日本社会と天皇制』一九八八年、柏書房
- 『天皇代替り儀式の歴史的展開―即位儀と大嘗祭―』一九八九年、柏書房
- 『天皇制と代替り』（後藤靖と共編）一九八九年、かもがわ出版
- 『天皇制国家の統合と支配』一九九二年、文理閣
- 『国際貢献論とアメリカ新戦略―世界の中の日本の針路―』一九九三年、大月書店
- 『まちと暮らしの京都史』一九九四年、文理閣

（以上、日本文化学部・上川通夫）

## 【第一部 講演】

戦争と大学——日本史研究者の反省——

立命館大学名誉教授 岩井忠熊

## はじめに

私は長年にわたって日本近代史という分野の学問をしてまいりました。私の達成というのはいったいしたことじゃないので、学問の正しいありかたを人の前で言えるほどのものではないことは自覚しています。それでも私のような歴史のプローチのありかたというものも許されるだろう。特に現在の情勢の中で、私のような学問のしかたをした者の成功や失敗というものの中から何らかの教訓を得ることは可能であり、また必要なのではないか。こういうふうに私は考え、この講演を引き受けたわけです。

歴史学をやってきたわけですが、ではその動機はいえ、何か歴史学のすぐれた本を読んで感動し、魅力を感じたから志したのかいえば、残念ながらそうではないのです。むしろ私にとって非常に切実だったのは、身をもって歴史を体験したというところから始まるわけにあります。中学生ないし高等学校の生徒だったころの主要な体験とその背景について、かいつまんで申し上げます。

私は中学生の時、一九三七年の七月七日に盧溝橋事件が起きました。そこから日中戦争が新しい段階に入っていくわけです。そしてすぐに出てきたのは「暴支膺懲声明」（八月十五日）と言われるものです。これは中国、当時は支那と言いましたけど、それが乱暴なことをするから懲らしめるために戦争をする、そういう声明です。それで最初は二、三個師団を送ったら解決できると思ったところ、中国がものすごく頑張るんですね。これでは兵が足りないというん



で、どんどんどんどん戦線拡大したんです。結局どうしたら戦争が終わるんだろう、何をしたらこれ勝ったことになるのか、そういう疑問が起りました。そこで第一次近衛声明（一九三八年一月十六日）が出され、「蒋介石を相手とせず」って言ったんですね。つまり、中国側を徹底的に叩きのめすのだから、中国の代表者である蒋介石などを相手に和平交渉をするなんてことではないんだ。徹底的にやっつけるぞ。そういう決意表明です。ところが、世界情勢を見るとそんなふうにはとてもいかないということがわかって行き詰まってきた。そうして次に「東亜新秩序声明」（同年十二月二十二日）を出したんです。それは、日本と、当時のいわゆる満州国と、支那つまり蒋介石に代表される重慶政府、これを取り込んだ「東亜新秩序」をつくる、これが戦争目的だという声明です。「暴支膺懲」、「蒋介石を相手とせず」、「東亜新秩序」、これらは全部矛盾しています。そのころ中学生だった私たちにはこれらのことが関係ないのかというと、そうでもないんです。なぜかというと、自分のことを省みれば、いったい何べん提灯行列、旗行列っていうものをやったか、数えきれないんです。おそらくみなさんの中には、旗行列とか提灯行列なんているものを経験された方は非常に少ないと思います。日の丸の旗を持って、中学生が学校から

連れ出されるんです。これを抜け出したら授業をサボったのと同じように叱られるわけです。「南京陥落祝賀」とかなんとか、最後には神社に行つて「バンザーイ」と言つて帰つてくる。そういうことを繰り返したものですから、第三者じゃないんですよ、中学生といえども。何か身に迫つて、「これおかしいな」、「なんてまあクルクルと世の中変わるんだろう」という思いもしながら、そういうところに参加していた。

もつとひどいのは一九三五年の日独防共協定（十一月二十五日）です。これは日独伊防共協定になるんですね。まだ名前を憶えています、パウルクツチ侯爵が団長のイタリーのファシスト党の一派が日本にやつて来て、そして満州国にまで来たんです。当時私は大連にいましたから、その歓迎会があつて、私は参加しました。どういふことかという、何百人か何千人か入れる運動場に集められました。そして剣道のお面、道具、小手をつけて、両側から何百人もが「わあーっ」「チャンチャンチャンチャン」と一団の前でやるわけです。こういうことで、私も実際参加したのです。日独防共協定つてのはただ精神的、基礎的なものですけど、日独伊三国同盟はもう軍事同盟です。平沼騏一郎内閣は、日独伊三国同盟の可否をめぐつて二〇何回かにわたる閣議を開いたんです。そしてノモンハン事件（一九三九年五月から八月）が起つて、日独伊三国同盟を即時に締結しろとなつた。ところが何と驚いたことにその八月、およそドイツとはその精神では反対側に立つソ連とが不可侵条約を結んだ（一九三九年八月二十三日）。呆氣にとられた平沼騏一郎という総理大臣は、「欧州情勢に複雑怪奇な情勢が生じた」と言つて総辞職する（八月二十八日）。内閣変わつちやつた。ドイツとソ連、ナチズムと共産主義というのは相容れないということとで三国同盟をどうするかについて採めてい時に、ドイツとソ連はあつげらんかと不可侵条約を結ぶ。しかし、ここからドイツは、ソ連の干渉は当分ないとみてすぐにポーランドに入つて行つた（九月一日）。そこで英仏はドイツに対して宣戦をして（九月三日）、ヨーロッパが第二次大戦に入つていくわけです。

容易ならぬ情勢になるわけですが、泥沼になつた日中戦争を何とかするために日本はどうしたか。日本は国内に全然ない石油と鉄鋼がどうしてもほしい、それでアメリカと交渉した（一九四一年九月から十二月）。アメリカ側にした

ら、日本は中国で世界の理解できないひどいことをやっているということ、うんとは言わないわけです。日米交渉はまあ長く続いたのですが、その当時日本の新聞では、日本の野村大使とアメリカのハル國務長官が、何べんも会議をしているということは伝えたんですけど、何を話し合っているのかという内容は国民には全然知らされなかった。そうして、一九四一年の十二月八日に突然、対米英蘭宣戦布告ですよ。それを我々が聞いたときはすでに真珠湾奇襲攻撃があったあとです。そのとき私は高等学校の生徒でした。呆氣にとられたんですね。もうあれよあれよと言っているうちに戦争になってしまった。そして戦争の経過は、日本はミッドウェー海戦以後、いつべんも勝っていません。全部負けです。その負けの果てに、一九四三年、昭和十八年の十月二日に「徴集猶予の停止」、つまりそれまで徴兵を猶予していた学生、生徒に対して声明を出して、「お前たちの徴兵猶予は停止だ」、「兵隊に行け」ということです。十二月に私も入隊しました。

## 一 歴史の受け止め方

### (一) 講義と読書

そのころ私たちは何を考えていたのか。私は、一つは、学校の講義と、哲学の書物を読むということにエネルギーを注いでいました。私は旧制の姫路高等学校というところで、江口朴郎先生という、のちに東大教授になられた方から、西洋史の講義を受けた。江口先生は当時珍しかった現代史家です。西洋史担当でしたが、現代史というものは西洋史だけを取り扱ってもわからないので、アジアの問題に触れざるを得ないんですね。そこで江口さんはどういうことを言ったかという、「蒋介石がいつまで経っても手をあげないのはなぜか」と言っただけ、「それは蒋介石が中国のナショナリズムを支えられているからだ」、ということ指摘された。私は、これは肯定的に言っているのではなくて、「この先生どうも、日本の日中戦争に大義がない、日本は勝てないということを言おうとしているんじゃないか」と思って、家に

押しかけて行つて話をきいたら、まさにそうだった。「日本は中国に勝てないよ」と言おうとしているんですね。正直に言つて、その話を聞いた時、はじめは茫然としましたね。だって私の家は大連にあるんですよ、中国にある。それだけじゃなくつて、国力など中国より、まあいろんな点で日本が上だとばかり思っていた。日本軍は中国より強いんじゃないかと、何となしにそういう信仰をもつておりました。それで、びっくりしたというのが本当です。しかしよく聞いてみると、江口先生の言うことにはどうも否定できない真実があるように思うようになったんです。先生はその当時、論文は書いておられましたが独立した著書はありませんでした。しかし戦後になって、東京大学に移られてから出された『帝国主義と民族』（一九五四年、東京大学出版会）という本があります。その内容は私が高等学校のとき、西洋史の講義で聞いたもののエッセンスみたいなものです。そういうものを聞かされ、まあこれで一つのショックを受けたことは事実でございます。

それからもう一つ。当時京都大学で哲学の中心的な教授だった田辺元先生が、『歴史的現実』（一九三九年、岩波書店）という、講演を本にしたような今でいうブックレットを出されていて、これを読みました。その内容は、我々が当面している現実というものは動かすことのできない歴史的な背景があつて出来上がつてきている、したがつてこれに我々がどう対処するかということを考えなければならぬ、そういう趣旨のことでした。これは非常によく読まれた本です。それから、京都大学の月曜講義というところで行われた『死生』（一九四三年）っていう講演、これを京大の学生課がパンフレットにして学生に配つたんです。私は、「ああ死生の問題まで学生課が心配してくれているのか」と感じましたが、そういう風な時代でございました。しかしその頃の哲学っていうのは、「類」と「個」、つまり「人類」と「個人」という問題を立てて、我々個人が人類といかに向き合っているか、その関係を説明しようとしていた。

ところが田辺先生は、「人類」と「個人」、「類」と「個」というものの間に「種」というものがある。だから我々人類や個人である前に「国民」であり「民族の一員」である、そういうことを言われた。考えてみると、その当時の日本人に即して言うと、確かにそういう言いかたが通用するわけです。だって、そのあとの私について考えてもわかるん

ですけど、「兵隊に行け」と言われたらサツと行くわけでしょ。これはまさに「人類」と「個人」との関係っていうよりも「国民」の義務として行ったわけですからね。だから「種」の哲学というものにやっぱ何か深い意味があるんじゃないかという風に思っ、京都大学に行ったら田辺先生の講義も聞けるだろうと考えました。実際、短い大学生活でしたけど、田辺先生の講義をじかに聞きました。田辺先生の哲学は非常に難しいものですが、授業で説明を聞く、なるほどそうかと思われるところがあった。

この二つに私は非常に感銘を受けた、そのことは偽らざることなのです。ところが、江口さんが西洋史という「ナシヨナリズム」は「国民」「民族」というのが当然担い手になるわけです。それと田辺先生の言う「国民」「民族」「種」、これ同じものだろう。その頃はそこまでは考えが行き届かなかったですね。

## (2) 戦争体験

そこで兵隊に行きました。軍隊生活というのは、これはまあ実にひどい話でした。私らは二等水兵で入りまして、海軍の新兵生活を送ったんです。水兵帽をかぶり、セーラー服を着て、ソーフっていう大きな雑巾袋を持って、冬のデッキに水をダア一つと流して、そこで一列に並んでダア一つとソーフで掃除する。つまり軍艦の上での甲板洗いの訓練を陸上でやった。手はもちろんヒビだらけになりますよ。そして試験を受けて予備役生に採用されて、その課程を経たものは海軍士官になれるわけです。二等水兵が一躍、予備役生になって、それでまあ徹底的にしぼられたわけです。私は小学校でも中学校でもね、いっぺんも殴られた経験がないんです。まあ中学生ぐらいになると、わるさが見つかって先生に殴られたという者はいました。しかし私はおとなしい生徒でしたから、先生に殴られたことはない。ところが海軍予備学生の基礎というところでは、私も数えられないほど殴られました。背筋が伸びていないとか、何でもないことで「貴様、待て！」って言われて、ポツカーンとやられるわけですよ。

凄まじかったのは武装駆け足競技でした。横須賀の武山海兵団というところで受けた基礎教育です。横須賀に続く相

当な急な坂を必死で走らせるわけです、往復。絶対に歩いてはいかんの。「倒れるまで走れ」ってね。したら六月で天気も悪かったんですね。武装して鉄砲持ったままバタツと倒れる。意識をなくす者が続出したわけですね。道路の両側に担架を用意してまして、倒れた人間を乗せて病院に運ぶ。こういう駆け足競技の訓練で死者が三人出たんです。死者三人出すような訓練をやって、責任者の行政処分なんて一つも出ていません。そういう教育のやりかたというのは本当に凄まじいものです。それでまあ、多少喝を入れられて、やや海軍士官に近づいていった、というのは否定できないと思います。

ただその海軍士官になるっていうのは一種の要領によるんです。海軍という世界でこういうことをしてはいけないんだ、こういうことしたら怒られるんだ、殴られるんだ、そういうことを敏感に判断して、そして海軍に通用するような生き方をしていく。たとえば、「尊敬する人間を言え」、とあてられる。最初にあてられたやつは何と言ったか。「楠木正成」って言ったんですね。楠木正成はその当時は文句のつけようのない人物なんです。したらそのあとに続くやつらはみんな「楠木正成」って言うんですね。楠木正成の事蹟なんて当時の学生連中が本当に知っていたとは、僕は信じません。小学校の国定教科書で習ったことを少し覚えていたかもしれませんが、その程度です。つまり学生は要領いいから、そこではそう言うっておけば文句ないだろうというのでそう答えて、みんな右へならえてそれを言う。一人だけ馬鹿正直なやつがいて、「ニーチェ」って言う。したら教官が「ニーチェってなんだ!」。ようわからなかったわけですね。結局ドイツ人らしいということで安心して、「三国同盟」そう言ったの。本当に滑稽な話です。あそこにいた学生はインテリゲンチヤの相当な部分を占めていたはずなので、本当に楠木正成を尊敬していたなんて思えない。

そして私は、海軍航海学校っていうところに入られません。軍艦機には必ず乗る航海士になるためです。ところがその途中で、「特攻」の話があった。当時は「特攻」ではなく「特殊任務」と言いました。危険な兵器に携わる「特殊任務」が募集されて、私はあまり深刻に考えないで応募しました。あまり深刻に考えられなかったのです、その当時は。ただこれは、志望しなかったら、おそらくあとでなんか撥ねかえりがあるだろう、そういう目に遭うんだったら先に志

願しておこう、という程度のことです。自分で志願しました。あとでわかったのですが、長男か一人っ子っていうのは採用しないんです。兄弟が多いのは歓迎。私は一〇人兄弟の一〇人目でした。男だけで六人、一〇人全部健在でした、あいにくなことに。だから、いの一番に「特殊任務」に採用された。

そして長崎県の大村湾にあった基地に送られて、そこで自分の任務が「震洋水上特攻隊」だということがわかったわけです。「震洋」っていうのは要するに高速モーターボートですね。この高速モーターボートには、先に二五〇キロの炸薬がついています。そして高速で敵の輸送艦に突き当たると、アメリカ軍が上陸する時、兵隊を積んだ輸送艦が艦側に縄梯子を下ろすと、それを伝ってアメリカ兵は上陸用船に乗り換える。その前に、つまり彼らがまだ輸送艦に乗っているそのタイミングにドーンと突き当たると、輸送艦と上陸しようとするアメリカ兵隊とを全部もろともに沈めてしまえる。それが我々の役割だった。そこで、敵の上陸予想地への配置というわけで、「石垣島へ行け」、「はい」ということでした。そして佐世保から石垣島に向かう途中で、アメリカの潜水艦、名前までわかっています、スペルドイツシュ号、こいつにドッカーンと魚雷を二発あてられました。海軍のことは「水没遭難」と言います。とにかく荒れ狂っていたんです、海は。私はスポーツはできないんですが泳ぎだけできるので、必死になって泳ぎました。そして、結局、三時間以上泳いだところで護衛艦に救助されました。私の所属していた第三九震洋特攻隊は全員で一八七人でしたが、生き残れたのは四五人だけです。私はその中に運良く入りました。その他いろいろありましたが、もう省略します。要するに敗戦になった。

その時に、「俺、何してたんだろう」とつくづく思いました。ずっと振り回されていたんです。少しあとから考えついた言い方だと、「国家に搦め取られていた」。自分の考えがあって行動するなんて何もできない。ではこれからどう生きていくのか考えました。やっぱり自分で自分の生きかたを決めていくべきだ。そのためには、やっぱり自分の知識をもった上で、何か自分の考え方というものをもって生きて行くほかあるまい。幸い大学の史学科というところに入ったわけだから、これからは歴史の勉強の中で、この戦争がどういふふうにして起こってきたのかということも明らか

にしていこうと思っただけです。

## 二 歴史学への一歩

そして学生生活を再開しました。やがて日本国憲法ができて、学問と思想の自由が確立するということの中で印象的だった一つは、マルクス主義との出会いです。それ以前は禁書でしたから、私はマルクス主義の本なんて一冊も持っていまませんでした。それが戦後、だんだん古本屋にも出てくるし、新しい本も出てくる。そういうものをポツポツと買いました。はじめはわからなかったですね。それで学生が集まって、あるいは先輩と、研究会をやる。それまでは学生の自主的な研究会は非合法でした。三人集まれば「集団」だというのが特高なんかの言い方でした。友人と出会って「やあ、こんにちは」というのはいいんだけど、三人集まったら完全に共謀とみなされる。研究会めいたものはいけません。つまり、大学の機構の中で、教官のもとでやる研究会は差し支えない。学生だけが三人集まると非合法的な研究会だとされた。それが日本国憲法のもとで自由になった。私ぐらいの年代の人間にとってはまさに「解放」というものを実感したことでした。

もう一つ、いわゆる講座派の、『日本資本主義発達史講座』（一九三二―三三年、岩波書店）の影響を受けた。まだそういう本は手に入らないので、いろんな人から借りてきてノートしました。そのノートは今でも持っております。しかしその講座で一番重要な役割を果たした山田盛太郎、平野義太郎両先生たちよりも、むしろそこで明治維新史を書いていた服部之総さんの影響を大きく受けたことは間違いない。服部さんの書いたものは全部、これももうむさぼり読みました。しかし正直に言うと、その学説には付かず離れずで、これから勉強しなきゃならんと思いつつ読んでいたということです。

講座派の人たちというのは、私らの口から言えば経済史に強い人たちです。むしろ私は政治史ないし思想史、文化史

的な関心が強かった。講座派の人たちは「軍事的」「反封建的」「日本資本主義」なんて言い方をしたわけですが、それはあの戦争中、戦前の日本社会で「天皇」ということばはタブーであって使えなかったからです。だけど結局は「天皇制」ということを言いたかったんですね。戦後それが自由になったわけですから、天皇制にかかわる政治史的な史料、思想史的な史料、文化史的な史料、それらはたくさんありましたので、私はそっちの方へ行こうと思いました。

### 三 論著のあゆみ

#### (1) 戦後の進歩的歴史学が対象としなかった裏側への関心

『日本近代思想の成立』（一九五九年、創元社）は、非常に不満が残っていますが、私が若いときに書いた最初の単行本です。ここでは、日本の近代思想の成立について、近代思想と国家主義思想の対立、抗争の姿として見ようとしめました。近代思想というものはスルスルスルと出てきたんじゃない。近代思想の他方には激しい国家主義思想があった。国家主義思想に対して妥協しないものは全部つぶされた。結局、近代日本での支配的な思想は、国家主義的思想だったのではないのだろうか。そして私自身も、その国家主義思想に巻き込まれていたんじゃないのか。だから唯々諾々として特攻隊まで行つたんじゃないのか。そこところに突き当たっていききました。だから説明すべきは、むしろ日本の国家主義、日本人のだれもが影響を免れえなかった国家主義思想にあるのではないのか。

一九六〇年の安保条約の第一次改定、この時期前後に、国家主義というものがどういうものかという論文を書いた。明治の国家主義というのは徳川時代の攘夷思想などとは違うわけです。みな一応近代的な装いをもっている。たとえば福沢諭吉などもそういう人です。ほかに私が問題にしたのは、北海道大学の前身である札幌農学校のアメリカー人、「ポーズ・ビー・アンビシャス」という言葉で有名なクラーク、ああいう人たちの影響が出てきた。農学校出身の人たちは、国家主義思想からはどちらかというと離れたところにいるようにみなされてきたんです。しかし私から言うと、あ

これは現実と絶えず妥協しようとする、現実主義路線だった。彼らは近代思想というものを、現実主義を裏づけるために取り入れる方向に進んでいった。我々の先輩にはそういう人たちが非常に多いですね。国家主義が明治時代の日本を支配したんだ、そのことに気づいているいろいろ書いたのが『明治国家主義思想史研究』（一九七二年、青木書店）であったわけです。

## (2) 日本文化と神道

次に私の視野がだんだん広がったのは、問題を日本文化、特にそれを神道との関係で理解しようとしたこととございます。神道というのは考えてみると不思議なものです。宗教だと扱われていますが、宗教には普通、宗祖というものがありますね。お釈迦さんなり、イエス・キリストなり、あるいはマホメットとかあるわけですよ。そして経典というものが必要ある。バイブルであったりコーランであったり。しかし神道には経典がないんですね。だけど日本では非常に神道が広くある、どこに行ってもある。村には必ずお宮があつて、そこではお祭りが続いているんですね。祭り太鼓や笛、そこに皆が集まつてお神輿を担ぐ。そこで五穀豊穰などを祈つて、今では交通安全祈願なんかも入る。ご利益信仰ですが、これまた八百万といって非常にたくさんさんの神さまがあるわけですね。お稲荷さん、天神さん、八幡さん、七福神など。たとえば京都の祇園祭には多くの人が日本中から集まつて来ますが、それらの人に祇園の八坂神社の祭神はどういう神さまか聞いても、おそらく答えられる人はほとんどいないと思います。だけど祇園祭というお祭りだけは知っているわけですよ。考えてみたら不思議な話ですよ。そういうふうには、神道ついているのは、何を拝んでいるかわからないにもかかわらず、ある意味では日本中の底から意識された。

## (3) 国家神道

しかし、それだからこそ実は、天皇制による神道の組織化ができたんだというふうに思いました。それはいわゆる国

家神道というものだと思います。それは明治維新の神仏分離政策によって組織化されたものです。だいたい宗教というものには管轄する役所、昔で言えば文部省の宗教局があつて、そこで寺などは皆管理されていた。ところが神社はどうかというと、内務省の神社局というところ、つまり内務省の一局が携わつた。ここでは宗教としての取り扱いはなく、まさに国家の祭祀をやるどころだという位置づけです。そして伊勢神宮を本宗として、官幣社を大社、中社、小社、国幣社も同じく大社、中社、小社というように組織する。その下に郷社があつて、郷社には村ごとの神社もあつて、整然とした神社政策がとられたのです。まさに国家神道体制にあつたわけです。

考えてみますと、我々中学生の時から旗行列、提灯行列というものにしよつちゅう動員されたのですが、その終点は必ず神社です。そこで万歳三唱して帰る。そういうところに国家神道の役割があつたと思う。

それが日本国憲法によつて、政教分離がはつきりして、神道もただの普通の宗教になつた。そうすると神社関係の人はどうしたかという、国家神道時代とその組織を維持するために神社本庁という宗教法人を作つて、そこに集まつている。もちろん、たとえば自立する力のあるお稲荷さんなんてのはそこに入つていません。しかし神社本庁の斡旋つていうようなものがないと成り立たないような神社もあつたわけです。それを抱えて神社本庁ができた。これは、日本経済の高度成長の成立とほとんど並行して強力なものになりました。今の安倍内閣の背景になっていると言われている組織に「日本会議」がありますが、その実態は神社本庁や「生長の家」の人たちが中心になっています。「生長の家」はその後、脱退してそういうことを一切やらなくなりましたが。

そういうことがあるので、私は国家神道と戦後日本人の思想生活というものとの関係を、歴史学として取り扱わなければいけないと思つて、取り組みました。私の書いた『天皇制と日本文化論』（一九八七年、文理閣）、『天皇制と歴史学』（一九九〇年、かもがわ出版）、『近代天皇制のイデオロギー』（一九九八年、新日本出版社）は、主としてそういう取り組みでした。

#### (4) 天皇代替わり問題

特に具体的な内容として問題にせざるをえなかったのは、天皇の代替わりの問題であります。昭和天皇が一九八九年に亡くなりました。そして、次の天皇（明仁）の即位礼、大嘗祭が一九九〇年に行われた。実はそれを予期して、日本古代史を専攻し、とくに神道に詳しくあった岡田精司さんと、中世の思想や文化を研究した河音能平君たちと一緒に「天皇制と祭祀研究会」を、八〇年代の後半に始めました。私としては、それまで知らなかった領域へ入り込んでいったわけで、たいへん勉強になりました。その成果が、岡田さんと共編の『天皇代替り儀式の歴史的展開』（一九八九年、柏書房）という本になりました。

このころにはそういうことをやった人はあまりいなかったのですが、私は研究会を組織して数年間そういうことに没頭していました。それで新聞やテレビに引き出されることがありました。あるテレビ局から即位礼当日にその模様を見ながら批判的な解説をするように頼まれました。僕がそれをやったらきつとあとで右翼団体から脅されるなあと思っただけ、これはやらなきゃならんだろうと思っただけで、東京まで行きました。実際はもうちゃんとシナリオができていた。しかもそのシナリオのほとんど全部しゃべれなかった。というのは臨時ニュースがその間に入って、過激派がどこかで火焰瓶を投げて儀式を妨害する、そういうことがタツタと起こったんですね。その臨時ニュースが入ったら、僕のしゃべるところは全部飛んで、「何ページまで飛びます」と言われて、見たら僕のしゃべるところ全部なくなっていた。だから、僕は右翼に脅されることもなくて、無事に帰ってきました。

#### (5) 靖国神社問題

そしてその連続として靖国神社問題に取り組むわけです。靖国問題が新たに問題になるのは、一つは戦争責任問題と、それから戦死者の慰霊というものはいかに行われるべきかという問題、これが絡んできます。直接の契機はやっぱり、首相以下の大臣とか国会議員たちの公式参拝ですね。それから、戦死者だけでなくA級戦犯で獄死した人たちを靖

国神社が祀ったっていう問題ですね。A級戦犯は戦死者じゃない。だいたい戦死者だけを祀っている時にはそれほど問題にならなかつたものを、A級戦犯を祀るようになって、昭和天皇さえそれに憤慨して、靖国にお参りしなくなつたわけです。

このことを背景にして、私は戦争責任問題とのかかわりで、『大陸侵略は避け難い道だったのか—近代日本の選択—』（一九九七年、かもがわ出版）という本を書きました。私は、「避け難い道」だったのではなく、避けることができただ、それを「避け難い道」にしちやつたのが、戦争責任という問題、というふうに考えたのです。また、『近代天皇制のイデオロギー』（前出）を書いたし、『靖国』と日本の戦争』（二〇〇八年、新日本出版社）という、ズバリその問題に切り込んだ本を書きました。

### （6）体制内反軍国主義の評価

私とした仕事というのは、どちらかと申しますと体制のなかにいる反軍国主義の評価、というところにあるのではないかと思っています。真つ正面から戦争に反対した者もいる。日本共産党はそういうものですね。それはもちろん正しいですね、それは正しい。けどなかなかできないでしょう、それを貫くことは。本当に殺されるような目に遭うことは避けがたい。そのような中で侵略を避けようとした体制内の反軍国主義というものに、一定の評価を与える。この人たちが政権を実際に握っていくことができたならば、戦争を避けることができたんじゃないのか、こういうことです。

『大陸侵略は避け難い道だったのか』（前出）で紹介したのは、谷干城という明治時代の陸軍中将、貴族院議員になった人です。この人は、国を守るために海岸線を防禦する軍備を作ることには賛成だった。しかし大陸侵略用の陸軍を作ることには反対だった。非常に明確に言つた人です。大陸侵略用の軍隊というのはこういうことです。野砲っていうものがあって、大砲を馬が六頭並んで牽くわけです。こんなもの、日本の本土では田んぼがたくさんありますので、自由に活動できないわけです。これはもう明らかに大陸野戦を想定したものです。その他に輜重兵というものがある。それ

は要するに武器・弾薬、そして糧食を運ぶための特別な兵隊で、これが求められた。日本で、当時のことばで言う「内地」で行動するにはそんな兵は必要ないんです。大陸でなら港から上陸して、ずっと奥へ入っていくわけです。長い兵站戦略です。すると軍事品を運ぶための輜重兵が必要になる。つまりこれも大陸野戦のため。その他、工兵とかなんとかいろいろあるんです。それでこういう軍備のありかたは間違いだということを明確に指摘して、そして地租増徴なんかに反対したのは谷干城という元来の軍人、プロの軍人です。彼は貴族院で反対した。その活動を論文でも紹介しました（『谷干城覚書』『立命館大学人文科学研究所紀要』七七、二〇〇一年）。

もう一つは西園寺公望の存在です。西園寺公望は、日清戦争までは賛成した人物ですが、それ以後の戦争についてはずっと消極的でした。彼はフランスに一〇年も留学していて、いろんな新しい思想や社会に接しています。そして少なくとも日本の中国に対する積極的な侵略戦争には全部批判的だった。盧溝橋事件のころにはもう八〇歳を超えていますから、積極的な動きはできなかつたですけどね。彼のやったことしたことはみんな、軍部が独走するということについて、なんとか歯止めをかけようという行動だったということに尽きる、と思います。たまたま私は、立命館大学編の『西園寺公望伝』（本編全四冊・資料編二冊、一九九〇―一九七年、岩波書店）の編集委員長を務めました。三分の一、本当を言うとは半分ぐらい、私がいいたんですね。しかし、西園寺公望にとって、自分の意見を通るようにするためには、やっぱり下のほうでそれを支える空気がないと、その体制内反軍国主義っていうものも貫徹できないわけです。そういうことを承知しながら、やっぱり、本当にその軍国主義を求めて煽った者と、そうでない者とを区別しなければいけないと思いました。

#### 四 反省・残された課題

そういうふうには、私なりに、その時の情勢の中で何を研究し、何を書くことが、研究者としてのなすべきことである

うかつていうことを、いろいろ考えてやってきました。私はできるだけ普通の国民が理解できることばによる学術文献にしたい、そういうことをめざしました。少なくとも、昔の講座派みたいに「反封建」「軍事的反封建的資本主義」とかいうことばは使わない。今は自由に言えるんだから、そんな言葉は使わない。

このほか私の研究関心には、戦争勢力の発展を結局防ぐことができなかったのはなぜか、という問題があります。たとえば、日本の陸軍が文字通り政治のヘゲモニーを握った画期として一九三六年、昭和十一年の二月二十六日、いわゆる二・二六事件があるわけですね。東京の真ん中で、陸軍の麻布三連隊が中心になって蜂起して、そして元首相、当時は内大臣であった齋藤実と、大蔵大臣高橋是清をはじめとする政治家や一部の軍人を殺しました。総理大臣岡田啓介は秘書官と女中部屋の押し入れに隠れて助かりましたが。しかしそういうふうな戦争になって行く時に国民大衆はどうしたか。動きがないんですね。そしてそういうものをむしろ同情的に見た部分がある、世の中の相当部分がある。しかもその中で、そういうものに真っ向から反対した勢力が潰れる。二・二六事件の前年、一九三五年の前半に、反体制運動っていうものがほとんどの息の根を止められています。だから反対勢力はどうして成功しなかったかという問題に、私は結論が出てこないんです。かろうじて、『十五年戦争期の京大学生運動―戦争とファシズムに抵抗した青春―』（二〇一四年、文理閣）という本でだけ、この問題に少し接近したとは言えますが、京都大学の学生運動なんていうのは、成功したって言ったって小さなものです。全国的に見たら成功していません。結局、我々は、私がそうだったように、国家社会の有力な主張というものに振り回されていった、というのが本当のところですね。

### むすび——大学の存在意義

そう考えると、私は、大学の存在っていうものは、やっぱり大きいと思うんです。大学というものを見渡すと、あちらこちらにまだ理性を失わなかった人がいたことは否定できない。私が個人的にお世話になったある先輩、動物学者

は、非常に戦争に反対で、日本軍が負けたというニュースが入ると、類を同じくしていた動物学者と二人で乾杯していました。日本軍が負けたというニュースのたびに乾杯していた人間なんていうのはどこにいたのかって言うと、これ大いにいたんですね。大学の中でその人たちの地位は講師。教授じゃないんです。その二人とも非常にお金持ちで、給料をもらわなくても暮らしていけるだけの収入をもっていた人です。そういう条件があれば、そういうこともできたのかなあ、ということになるんだけども。とにもかくにも、そんな人が生きています。しかも周辺の人はそれを知りながら、「あいつはしゃあないやつやなあ」と言ってそれを咎めないでいた、という事実は否定できない。

現代はもつと大つぴらに語れる時代です。一方では人文科学を軽視、敵視して、工学とか医学部などいわゆる実学だけを推進していくというような風潮もあります。そういう意見はしばしば財界や政府筋の人間から漏れてくる。それは今新たな段階に達しようとしていることの表れです。そういう時にでも非常に必要なことは、せめて大学だけは真実を語る場であってほしい、理性の府であってほしい。これがなくなったらいつたい何を頼りにして、国家社会に振り回されない人間になることができるだろうか、ということをおもうわけでございます。これは、私自身の反省でもあります。私は、大学へのこの期待を捨てることはできません。私は九四歳にもなりますので、今さら何をわめく、お前の言うことなんか世間が無視するだろうと思われるかもしれません。しかしかつて、「南京陥落万歳」と言って旗行列に参加した、そういう世代は、私らがいなくなると、消えてしまうんですね。これは困ります。歴史というものは消すことのできないものであって、だから語らなきゃいけない。そういうふうにして、今日もつまらんことをしゃべりに参上したわけでございます。終わります。

## 【第二部 学生からの質問に答える】

※聞き手は上川通夫

**司会** 学生から出ている質問を紹介いたします。大きくは三つあります。

まず一つ目です。海軍での厳しい教育は、現代人には理解できないほど非合理のもので、精神主義的で画一的ではないか。先生が体験されたそういう教育は、現在の日本に残っていないか、尾を引いているような気がする。というのが学生からの質問です。また、戦争で人を殺すということについて、体験を通じたお考えを知りたい。何人かの学生からの質問です。

**岩井** 海軍での教育・訓練というのは、一口に言えば海軍士官の型にはめらるっていう教育です。海軍士官はかくあるべしという教育です。「スマートで目先が利いて几帳面、大和魂これぞ船乗り」、ということが盛んに言われました。「スマートで」というのは服装や見かけのことだけではなく、要するにキビキビと動け、ノソノソとするな、そういうことです。例えば教育を受けている間は歩いていちやいけないうですよ。若い士官は必ず駆け足してなきやいけない。

しかしそれらが何をもちたらかです。戦後に旧海軍の幹部だった人たちが「海軍反省会」っていうのを作って、何年にも亘って話し合いをして、それを残しました。P H P 研究所から九冊出ています（戸高一成編『証言録 海軍反省会』二〇〇九年）、P H P 研究所。現在では十一冊）。その中には旧海軍の中佐や大佐くらいの人が多いです。海軍省・海軍軍令部・連合艦隊、そういうところの幕僚だった人たちで、数人の少将・中将だった人も参加しています。そこで反省として出るのは、海軍の教育は型にはめる教育だ。その結果、型にはめられていた海軍士官には、実際の流動的な戦況に対応する柔軟さが出てこなかった。型にはまった対応しかできなかった。それを、海軍兵学校の教育に対する反省として言っています。私もまったくその通りだと思えます。ただ決して彼らは頭腦的に馬鹿だったわけじゃなくて、むしろ優秀な人らですよ。旧制中学を出て海軍学校に受かるっていうのは、非常に上位の人です。選ばれて海軍大

学校甲種課程に行つて、その中で頭角を現したような人たちが、海軍省・軍令部・連合艦隊の幹部だったわけです。その人たちがまさに型にはまった人たちで、型の外に出ることはできなかったというところで、そのことを反省しています。これは一面の真理だと思えます。

私は大学を卒業してから、たまたま非常に親しくなったある物理学者がいました。その人が亡くなった時には、送る会の委員長までしました。その人は理論物理学という領域の人です。

その人は海軍兵学校の七十五期といひまして、終戦の時に最高学年だった人です。ですから海軍兵学校を卒業して、海軍士官になることはなく、そのまま終わって普通の大学生になって、非常に優秀な理論物理学者になりました。彼はなんと七十五期のヘッドでした。ヘッドというのは一番です。毎朝生徒全部を集めて号令をかけた人間だった。そのままいったら海軍大将になった人ですね。その人からある時に反省を聞かされた。実は、ヘッドの責任として、自分と同じ学年だった海軍兵学校の生徒の名簿を持っていて、彼らと連絡を絶たない、そういう生活を戦後何年かしていた。しかしある時ハツと思いついた。結局彼も、「俺は海軍兵学校の型にはめられて、その外に出ていないじゃないか」という反省です。それで初めてその呪縛か



ら解放されて、自由にものを考えるようになった。理論物理学の世界は、型にとらわれた考え方から解放されなかったらとても入れない世界です。

ところがやっぱり依然として、そういう考え方は残っていると思います。財界などでは「要求する人間像」というのが新入社員教育などいたるところで見られる光景じゃないですか。あれはやっぱり本当は恐ろしいことなんだ。目前の役には立つでしょう。デパートの新入社員はみんな集まって一斉に頭下げて「毎度ありがとうございます」ってやらされる、あの型です。お客さんに「ありがとうございます」って言うのは当たり前でしょう。だけど、骨絡みでそういう人間にしようというのは、本当は恐ろしいことです。

質問の後半について、戦争で人を殺すということについて、私は思い悩んだ経験はございません。海軍の人間っているのは、大体そうだろうと思います。船に乗るわけですね。船に乗って敵の顔は見ない。だから陸軍の人のように、日本刀で刺突するとか、そういうことはあまり考えないですね。大体、私が入ったところの海軍の人間には負け戦ばかり。一回も勝ったことがないっていう人が多いんです。それはどういった形でやられたかっていうと、飛行機でやられたか潜水艦でやられたかのどっちかです。だから相手の顔を見ていないんですよ。こっちもまた、相手を殺すということについての葛藤は経験しなかった。

ただ復員して、一体どういふふうにして生きていこうかっていうことは考えました。折角生きてきたんだから。そういうことは思ってきました。

**司会** 二つ目の質問は、先生の大学生活についてです。先生が大学に入られたその一九四三年十月に、文系学生の徴兵猶予が解除され、十二月に入隊された。そうしますと、入隊前の大学生活はごく短かったということですね。その間の実感等を教えてください。

**岩井** 私が大学に入ったのは十月、そして十二月十日に海軍に入りました。その間に徴兵検査などの行事もありました。実は海軍に入る三日前まで、私は大学の授業にいろいろ首突っ込んで聞き見歩いた、というのが本当ですね。大学

に対してそれだけ期待があった。折角大学に入って、これからいろんなことを勉強できると思ったところで兵隊へ。残念だなということです。兵隊に行くことに決まったから、もう大学に行くのはやめて家にいたっていう人が多いです。もともと私の家は大連にありましたから、帰ることもできなかったのも事実です。私は好奇心が非常に強くて、田辺先生の哲学だけじゃなくて、いろんなことに出て行きました。それで褒められました。

忘れもしません、梅原末治先生という考古学の先生。この先生は学生を叱ることで有名でした。その先生が、「学生、出席が悪い」ってえらい怒りだしました。出席している人間に「出席が悪い」って怒るっていうのは不合理な話ですが、しかしとにかく出ている学生一人一人に「来週出てくるかどうか言え」って言うんです。私一人、「来週もう軍隊に入っていますから、出て来れません」って言ったら、大変褒められたんです。「そんな学生がいるとは思わなかった」と。そこに出席していた者で、来週から出られないという境遇にあるのは、私一人だったということもあったと思いますけれど。自慢ではなく、ただのエピソードでしかありません。梅原先生に怒られた友人はたくさんいますが、褒められたのは僕一人じゃないかと話すと、皆その話を面白がりました。

梅原先生の考古学まで、って言ったら失礼になりますけれど、考古学の話聞いて兵隊に行って何になるかといったら、何にもなりません。しかし、そういうふうにいるんな講義に出ました。チンプンカンプンで何だかさっぱりわからん授業もありました。高田保馬先生の経済論なんていうのは、有名な先生だからっていうので出てみましたが、何にもわからんかったですね。そういうように、いろんなものをかじってみたというのが、本当のところですよ。それだけ好奇心が強く、また大学に対する期待があった。

戦後生きて帰って、大学へ戻って勉強したいと思って、勉強しましたけれども、やっぱり当時の事で思い出すのは、食うものがなかったっていうことです。切実でした。朝メシ食べて、昼メシ食べて、夕メシをどうやって食おうかなっていうことを、心配しなきゃならんような生活でした。あらゆるアルバイトをして、何とか食い繋いできたんですね。一回だけ夕食を抜いた記憶がありますが、他はとにかく三食何とか食べていました。「俺は戦争に行つて死なないで

帰ってきたんだから、こんなことで死ぬなんていうのは情けない、絶対生きてやろう」っていう気持ちがありました。実をいうと、戦後は大学生でありながら大学の授業にはあまり出ていません。大学の図書館などで勉強する機会の方が多かったですね。大学ではなくて、研究会で勉強していたというのが本当のところですよ。

**司会** 今の点、もう少し伺いたいことがあります。一九四三年の暮れのことによく知られていますのは、学徒出陣の神宮外苑での行進です。京都ではそれに類似する行事があったのかどうか。それから、大学の教員は、出陣する学生にどんな言葉を送ったのか、先生のご記憶のことがございましたらお話しください。

**岩井** 東京の明治神宮外苑で学徒出陣の催しがありましたが、あそこで東条首相が出てきて一席ぶっています。これは別に、私は、東条首相の演説を実際に目の前で聞いたことがあります。それは高等学校の生徒の時です。当時、インターハイ、全国高等学校競技大会がありました。私は高等学校の時、弓道部でした。そのインターハイで、東京で弓道の試合があつたんです。そして明治神宮のグラウンドで、インターハイ参加の高校生を前にして、なんと東条首相が出てきて激励の挨拶をしました。だから東条っていう人の肉声を直接聞いたわけです、私は。

しかし、京都では、一九四三年にいよいよ兵隊に出ていくという時に、京都全体の学生が集まるということではなくて、学校ごとに集会がありました。京大では農学部グラウンドで儀式みたいなものがありました。その時は羽田亨という東洋史の先生が総長でした。羽田先生は、とにかく激励もしたけれど、学半ばに出て行くことについての残念みたいなことも語られました。しかしそこはやっぱり儀式でしたから、そのあと分列行進みたいなものをやらされたと思います。平安神宮まで歩いて行ってお祓いを受けました。

それはそれで終わったのですが、今度は学部ごとに送別の催しがありました。文学部では、学生集会所で、先生たちがお別れの言葉なんて言ったと思いますけれど、「武運長久を祈る」とか、そういう決まった言葉をほとんどの先生が言ったんです。国史学科の西田直二郎主任教授なんかは、神話みたいなことをポソポソと喋って、何を言おうとしているのかよくわからなかった、というのが正直なところですよ。ところがただ一人、「無事に帰ってまた大学で勉強しなさい

い」と言ったのは、ドイツ文学の成瀬無極先生でした。後で聞くとこの先生は確固とした考えを持っておられたそうです。あんなことで戦争に駆り出すのはいけないというお考えで、戦争中にも批判的なことをしきりに言っておられたというのを聞きますと、あれは本心から言われたんだらうと思います。あの場でああいうふうに言い切った方はただ一人です。なかなかあの当時、「生きて帰ってこい」とは言えなかったのですよ。その先生は「生きて帰ってまた勉強しなさい」と言われたんです。私はのち、生きて帰るための努力をしなかったんじゃないのか、というふうに反省します。やっぱり大学っていうところには、そういう方がおられたんですね。

**司会** 三つ目の質問です。敗戦で、先生は佐世保で、部下全員の復員を手助けしてから、最後にご自身がお帰りになり、京都にお戻りになって最初にすることが大学への復学届の提出だったと聞いています。そのあたりの事情や思いをお聞かせください。

**岩井** 戦争が終わった時、私は熊本県の天草島にいました。今は天草島と九州本島とは橋でつながっていますが、当時は船に乗らないと九州本島まで行けない。復員する人たちは日本各地から来ていますので、汽車に乗るために九州本島まで送り届けなきゃいけない。それが私の仕事の一つでした。航海が専門ですから、大発動艇という船を私が指揮して、取り舵、面舵っていうようなことで、何べんか九州本島に人を送り届けた。最後には私自身もその船に乗って、佐世保から川棚っていうところの基地まで人を送り、自分もそこで復員したわけです。私は八月二十何日か、比較的早く復員しています。ところが後で知ったところによると、非常にけったいな話ですけど、私が復員してから、五月一日付で海軍中尉に昇級しているんです。海軍少尉には正八位という位階が与えられるんですが、中尉になったというんで、今度は従七位になった。そんなの知らなかった。しかし、「もう軍隊はここに終わったんだ」、「もう後は学生に戻る」、その意識だけでした。

行くあてはほかになかった。だから真つ先に京都に行きまして、大学に行って、休学していたわけだからその籍を戻して、そして授業に出ることにしたんです。ただ食糧事情が悪いので、当時の先生たちは栄養失調状態ですよ。だから

授業をする気力も体力も出てこない。だからいろんな授業が事実上は休み。その当時の言葉で「食糧休暇」という言葉があつて、それで先生は出て来ない。それで私は図書館で勉強し、授業をあまり聞かなかつた、その原因の一つです。ただ授業を聞いた場合もあります。どうやって食糧を手に入れたのか知らないけれども、東洋史の宮崎市定先生という人は、相当なボリュームの授業をきちんと根気よくされました。先ほど申しました考古学の梅原先生も、ちゃんと授業をされましたね。だからきちんと講義する先生の授業には継続的に出ました。だけど本当に聞いていても痛々しいような、栄養失調寸前みたいな先生も、名前は申し上げられないけれど、いらつしやつた。聞いていて、こつちも苦しくなるような、そういう方がおられた。そういう方たちは家族を抱えているので、食糧を何とかしなければならなかつたので、生きていくのは大変だつたらうと思います。大学の実態つていふのはそんな状態でした。

**司会** 関連しての学生からの質問があります。先生が敗戦後に大学へ戻られてからの学問上の問題意識をうかがいました。では、現代の学生はどういう勉強の課題、卒業論文の課題を設けるべきか。そういう質問です。

**岩井** 率直に私の意見を言えばですね、今、いわば日本の国民がどういう課題に直面しているのかということ、自覚的にとらえる必要があるだろうと私は思います。しかしですね、私は、私のようなアプローチのやり方もあるけれど、違った歴史学へのアプローチの仕方を排斥するつもりは毛頭ありません。もつと言えば、何か歴史の本を読んで非常に感動をして学問の中に入つていくつていうのもあると思います。入つていけば、学問というものは中身でちゃんとつながっていると思います。私は、戦争との関わりがあつて、こういう道を歩んだのであつて、現代は現代の中に、それぞれの人それぞれで問題を見出していくべきであろうと考えます。ただ、自分たちの小さな世界だけで生きていくのではなくて、いつでももつと大きな世界を目指していくつていう、そういうことだけは忘れないようにしてほしいと思う。ただそれだけの話。

**司会** 最後に、岩井先生の現在の研究関心についてお聞かせください。

**岩井** 私の専門領域の一つに思想史があります。若い時から思想というものに非常に関心がありました。だから田辺元

先生の哲学の授業にも出た。その関心は今でも続いています。

また、戦争末期に逮捕され、そして非常に不条理なことに戦後もしばらく刑務所にいる間、ほとんど餓死みたいな状態で亡くなられた、戸坂潤っていう哲学者がいました。私は戸坂さんの著作に触れて、現代科学と哲学との関係を少し理解することができました。何となしに私は、自分が戸坂哲学の受け売りをしているかのような気持ちになることは否定できません。戸坂さんはあの厳しい状況の中で、『日本イデオロギー論』（一九三六年、白揚社）という本を書いているんです。あれはね、あの当時は相当覚悟しなかつたら書けない文章ですね。そういうことで私は、人から何と言われようと言うべきことは言おうと思いました。たとえば私は敢えて、『近代天皇制のイデオロギー』（前出）なんていう、ある意味ではおどろおどろしいような題名の本を作りました。誰かが言わなきゃいけない、ということを決えず思っています。我々が言わなきゃ、戦争を告発するなんていうことは、なかなか難しいですね。理屈と道理で言うだけじゃなくて、一つの情念みたいなものを込めて言おうとすると、体験的なことを通じて語り掛けることが人を納得させるんじゃないだろうか、というふうにも思っています。そういうところに私の特色があるのだろうと思っています。今更ここにいたって志をあらためるわけにはいかないので、それで通していこうと思っています。

ただやり残した仕事を完成させたいとは思っています。私は、今いる老人ホームに入る時、大量に持っていた史料や本を七割方処分してしまいました。今になって「しまった。あれを捨てるんじゃないなかつた。」と思う本がたくさんあります。そして、ずっとやろうと思ってきた日本近代史学史、つまり歴史学の歴史について、これを放棄しようと思っていない。今でもちよいちよいやっています。あとは命との競争です。